

油屋のねこ（兵庫区）

江戸（えど）からあらたまって、明治（めいじ）となったころの話です。

いまの兵庫区西出町（にしでまち）のあたりに、日向屋（ひゅうがや）という油問屋（あぶらどいや）がありました。この日向屋には、奉公人が十人あまりもおりましたが、いつのころからか、飯（めし）たきのおばあさんが、どこからかもってきてかわいがっている猫（ねこ）が一びきおりました。顔の半分が左目にかけて黒かったので、みんなはクロとよんでいました。



もともと猫は油が好きなものですが、油問屋に住みついても、クロは油をなめるようなことはしませんでした。ただ、かわったことといえば、家の人たちのはきものを、げたでもぞりでも、それが誰のものであるかをいちいちよく覚えていました。それで、うっかり他人のはきものをはいて出かけようとすると、すぐにとんできてそのはなおにかじりついて放しません。はっと気がついて自分のとはきかえるまで、じっと見ているのでした。

ある晩から、主人や奉公人の手ぬぐいなくなるようになりました。二、三日ぐらいいつ、消えてしまうのです。

「おまえら、うちの手ぬぐい知らんか。」

「うちの手ぬぐいも、あれへんようになってしもた。」

「おまえ、かくしたんとちがうか。」

「なにいうとんねん。」

おたがいに、だれかがかくすのだろうと、うたぐりあって気をつけていましたが、そんないたづらをするものがあるようにも見えませんでした。



それからしばらくたって、ある月の暗い夜のことでした。番頭（ばんとう）の与兵衛（よへえ）が夜遊びに出かけたその帰り道のことです。おそく寝しずまった町を家の近くまでくると、とある家のせまい横手の路地（ろじ）から、クロが手ぬぐいを口にくわえて出てくるではありませんか。与兵衛は、おやっと思っただしになり、げたを手にもって、足音をたてないように見えかくれにクロのあとをつけたのでした。

クロは家並みの軒下（のきした）ばかりをつたって、南の方へあるいていきます。二つほど横路地のかどを東へまがっていきます。与兵衛はつま先で歩いて、さとられないように二百メートルほどクロのあとを追いかけてました。

やがて、東出町（ひがしでまち）の湊川（みなとがわ）の西堤防（ていぼう）に近い松尾稲荷（まつおいなり）社の西に、淡路屋（あわじや）という乾物屋（かんぶつや）の隠居（いんきょ）の住んでいた家が、一軒あき家のまま残っているところまできました。その家はあまり大きくはありませんでしたが、黒板塀（くろいたべい）に囲まれていて庭には植込みもありました。

そこまでくると、クロは板塀をかきあがって、うちらへとびこみました。

「おや、おや。」

与兵衛は、クロがかきあがったところまできて、板塀を見上げました。ふと見ると、板塀にはふしあながあるではありませんか。与兵衛は、そっとのぞいてみました。

クロは手ぬぐいをそばにおいて、乱れた草の上でころんだり、すわったりして、楽しそうにふざけていました。しばらくして、クロは手ぬぐいを頭にかぶり、あと足で立って踊りはじめました。

与兵衛はあっけにとられて、なおも息をころして見ていますと、クロは手ぬぐいをくわえて、かたわらの細長い松にのぼって、手ぬぐいを枝にかけると、枝から板塀にとびつき、外へ出てもとの道を家へと帰っていきました。

あくる朝はやく、与兵衛がその家の庭を見にいくと、あたりの木の枝に、自分の家でなくなった手ぬぐいやぬか袋までが、たくさんぶらさがっているのを見つけた。驚いた与兵衛は、家に帰ってみんなにゆうべからのありさまを話して聞かせました。

はじめは、みんな信用しませんでした。やがて、

「化け（ばけ）猫やで、クロは。」

「何か、あたりがあるのとちがうか。」

「ああ気持ち悪る（わる）。」

「はよ、すててしまい。」

とうとうクロは、化け猫ということになってしまい、遠くへ送ることにしました。そして、遠くへ油を運ぶときに、荷車（にぐるま）に結びつけて人里はなれた野原へすててしまいました。すてにいった人が家に帰ってみると、クロのほうに先に帰っていました。

「もっと遠くですてたろ。」

こんどは、油を積んで淡路島をいく船の便（びん）があったので、店のものがクロをつれて船に乗り、淡路島からの帰りぎわに、船から陸へほうりなげました。海を越えた島ならと思ったのです。家へ帰った店のものが、その話をしようと思って座敷（ざしき）へあがろうとすると、クロは座敷のすみにすわって、爪先（つまさき）をなめているではありませんか。すてにいった店のものはあっけにとられて、何もいえませんでした。



「むりにすてたら、きつと何かあたりがあるで。」

「そんなら、そのままにしとこか。」

ということになって、以前と同じように油問屋でくらししていました。

そのうちに、飯たきのおばあさんは、だんだん年をとって働けなくなってしまいました。そこで主人は、油問屋の借家（しゃくや）の長屋の一軒に住ませることにしました。それから、クロはおばあさんの家にばかりおるようになりました。



ときおり、おばあさんの枕（まくら）もとで、夜なかにクロがなくので目をさますと、どこからもってくるのか、銭（ぜに）のはいった財布（さいふ）がおいてあります。日向屋へ問いあわせても、店のものではないといひますし、近所でも財布がなくなったという話はありませんでした。

半年ほどして、おばあさんは死んでしまいました。みんなでおばあさんのお葬式（そうしき）をしたその晩からクロの姿は見えなくなりました。クロがどうなったかは誰も知りません。